

自著を語る 岩崎充益

コロナ禍による危機感からDX(デジタルトランスフォーメーション)への機運が生まれました。加速度的変化による、予測できない未来が到来します。学校の姿も大きく変わります。旧態依然の教え方を繰り返している先生は楽かもしれません、近い未来に自分の席がなくなるかもしれないと思いませんか。そんな思いからこの本を執筆しました。

教員は異色であれ

あるユーチューバーの授業をインターネットで視聴しました。説明が実に分かりやすく多様な道具を使って説明していました。何万という全国の児童生徒がアクセルする理由がわかります。私はコロナピア大学で英語教授法を学びました。今では無料で教授の授業を視聴することができません。先日、ある教授の授業を視聴し、質問することもできませんでした。高いお金を払い

アメリカに行かずに、日本にいて世界の一流の教授の授業が受けられるのです。

これからの教師は異色であれと言いたい。なぜなら異質な教員は児童生徒の様々な認知の特性に的確に対応できるからです。

これからの学校教育が目指すのは一人ひとりの多様な幸せ(Well-being)の実現です。

愛知者を育てる

今の子供たちは情報の渦に巻き込まれています。インターネットを開けばどんな知識もいとも簡単にアクセスできます。これからは多様な考え方の様々な国の人々と付き合っていく必要があります。愛知者を育てる必要がありません。愛知者は知識の概念化が出来る人です。以前の学校教育に求められていた迅速に唯一の答えを導く思考ではなく、様々な可能性を追求する学びです。教える側が変化しないと、児

童生徒の潜在的な能力は引き出せません。

知識と記憶

カミュは『ペスト』の中で言っています。「ペストと生との賭けにおいて、およそ人間がかかることの出たものは知識と記憶であった。」

知識は万人が手にすることができません。その知識を生かすも、眠らせるもその人の行動力にかかっています。記憶は人への行動に導くため蓄積された知識の倉庫です。倉庫の中の知識を必要に応じて引き出し、行動に移すとき、生きた知識となります。コロナ禍は自然が人間に与えた教訓のように思えます。専門家には言わせると「学校」「教育」という言葉は中国では二千何百年も前からあったと言われます。今日この「教育」「学校」の意義を再考する時です。学校社会に潜む同調圧力、阿吽の呼吸を打破し、学びの形を果敢に変えていく時です。